

# 対人援助学&心理学の縦横無尽(2)

## 大震災に思う

- 1)助動詞「る・らる」をめぐるポリティックス
- 2)単線性物語としてのナントカ神話



### サトウタツヤ@立命館大学

対人援助学の里程標から、タイトルを変更して2回目。今回はやはり地震から連想したことを書かせてもらいます。

#### 1) 助動詞「る・らる」を巡るポリティックス

3. 11の東日本大震災以降、私たちの認識が大きく変わったと言われる。そして、15年前におきた阪神・淡路大震災の時のことも様々な形で思い起こされ、語られることになった。

開催するかどうか慎重に検討された春の選抜高校野球大会では、創志学園高校（岡山）の野山慎介主将が選手宣誓をおこなった。

宣誓。

私たちは16年前、阪神・淡路大震災の年に生まれました。

今、東日本大震災で、多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。

被災地では、全ての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。

人は仲間に支えられることで、大きな困難を乗り越えることができると信じています。

私たちに、今、できること。それはこの大会を精一杯元気を出して戦うことです。

「がんばろう！日本」

生かされている命に感謝し、全身全霊で、正々堂々とプレーすることを誓います。

平成23年3月23日

創志学園（岡山） 野山慎介主将

この宣誓に胸を熱くした人も多かったようである。

スポーツ選手・芸能人・一般の人を問わず、被災地の支援に立ち上がった。その際に「被災地の人を勇気づけられたら、元気づけられたら、うれしいです」というような物の言い方が物議をかもしかけた。上から目線だ、というのである。言葉の問題として非常に面白い。というのは助動詞「る、らる」は大きな変化のただ中にあるように思えるからである。「見れる」という表現は、「ら抜き言葉」として忌み嫌われた時期があった。しかし、今では定着しつつある。その結果、何がおきたか。

「る、らる」は受身・尊敬・自発・可能を表す助動詞であるとされるが、見るにおいては、見れる＝可能、見られる＝受身に分化したと考えられるのである。食べるも同様である。食べれる＝可能、食べられる＝受身である。今の子どもは、「\*\*ちゃん、これ食べられるよ〜」などという自分が食べられてしまう、とあって怖がるというマンガがあった。私なども、映画だったか演劇だったかの席に関して「一番前で見られます」と書いてあるのをみて、むしろ自分が人から見られてしまうところを連想してしまったりした。

「自分の芸なり料理なり（その他なんでもいいのだが）で被災地の人を勇気づけられたら」という表現は、可能を表しているのではなく自発を表している表現なのではないだろうか。自分の芸なり料理はたいしたことはないかもしれない、しかし、芸をみたり料理を食べたりすることで、もし仮に相手の方が元気になるべうれしい、というような表現として、助動詞「られ」が用いられているのではないだろうか。上から目線で、と非難する人は、言うまでもなく自分が上から目線で被災地や被災者の人を見ているのであり、それが他者の喋る「る・らる」によって喚起されてしまうのであろう。勇気づけられたらうれしい、という時の「られ」は自発の意味を表している。

## 2) 単線性物語としてのナントカ神話

この大震災は福島第一原発に多大の被害をもたらした。これだけの震災なのだから、東京電力の責任ではない、という意見が強く出るかと思ったらそうはならなかった。その理由の一つに、安全だということを強調していたから、ということがあげられるだろう。安全だから大丈夫、何があっても安全だから、その先のことを考える必要はない、という安全神話を振りまいていたのである。さらに言えば、安全なのに安心できない人は非科学的な人であると非難さえしていたのである。このような上から目線で接しておいて、安全が損なわれました、と言っても誰も同情してくれないのは当然であろう。

福島第一原発の件で、面白いというか許せないのは、測定にまつわる話である。安全神話を振りまいた側は、科学は信頼できる、という論調であった。そうであれば、どんなときにでも科学的態度を取るべきであるのに、必ずしもそうはなっていない。科学の基本が測定や測定に基づく予測にあることは誰も否定しないはずであり、だからこそ、多額の予算が放射能の測定や拡散予測のためにもつぎ込まれてきた。このような時こそ、東電側は測定をしなければいけない。科学に基づいて安全であることを主張しなければならぬはずである。

しかし。

- 1 測定器の数が揃わずに測定をしないで結果的に人を危険な目にさらした場合があった。
- 2 SPEEDI という皮肉な名前のシステムで得た予測を公表しなかった。
- 3 被害が極めて広範囲に及ぶため、危険を感じた人々が自ら測定を始めたところ、測定にはいろいろな条件が関係するし誤差があるので、混乱を引き起こす可能性があるといっていた学者がいた。
- 4 極めつけとして、一時期、安全な数値を超えているのに安心せよと言ってみたり、安全基準そのものを動かして安全だといい、(安全に基づかない) 安心を強要した。

これはエッセイなので、細かい論拠はあげないが、いくら好意的な人であっても以上のような例が次々と出てくるのであれば、安全を認知して安心することは難しいだろう。また、当局側のこうした態度には、明らかに自分たち以外の人々は愚かだという前提が透けてみえる。

上記4つの例は以下のような態度に由来する。

測定するかどうかの判断も専門家が行う。測定できなければ科学的事実はない。

測定する際、素人は手をださず専門家に任せておけばよい。

測定値に基づいた安全かどうかの基準設定は専門家に任せておけばよい。

公表が必要かどうかという情報公開の選択は専門家が行う。

つまり、完全な専門家主義でありパターンリズム（父権主義）である。科学技術が私たちの手を離れて久しいが、地球上の人々がすべて抹消されかねない力が既に地球上に存在しているという意味で、核問題はその中核の一つである。人間が作り出したものに間違いは無いと言い切るのが安全神話である。神話と一般に言った場合には古くからの話で信じるしかないもの、というニュアンスを持つ。私たちはそれに加えて単線的な物語であるという特徴を指摘したい。そうした単線物語を受け入れるのではなく、複線性の物語が今こそ必要とされている。

ナントカ神話と呼ばれるものは原子力安全神話の他にもいくらでもある。私たちは、原子力事故に関するパターンリズムに対抗せねばならないと共に他のあらゆる領域における単線的な神話をうちくずしていかねばならない。何かを考える際には常に複線性を念頭において、単純な因果で終わるような物語は、その内容ではなく形式において批判的に吟味されねばならないのである。

私が開発した複線径路・等至性モデル

(<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/paper.html>) というシステムは、政策議論にも使えるのではないかと思う。私はこれまで、母性神話、IQ 神話、血液型神話、目撃証言神話、健康神話（病気は不幸神話）など様々な神話を相手に研究を行ってきたが、そうした具体的なレベルの研究と、複線径路・等至性モデルという理論的な研究は、東日本大震災後の今、合致していたたと実感できる。そういう意味で東電の安全神話をめぐる様々な動向は私個人にとっても感慨深いものとなった。